

高額医療費時代の 次世代がん医療開発

高額医療費時代を迎えた状況下で、日本のアカデミアにおけるがん研究の、がん医療開発における責務を見直すとともに、日本のアカデミアに求められる産学連携のあり方は、いかなる形であるのかを考えます

日時

2016年10月7日(金) 15:30-18:00

会場

第1会場(パシフィコ横浜1階メインホール)



座長

野田哲生

がん研究会がん研究所所長

宮園浩平

東京大学大学院医学系研究科教授

パネリスト

川口 恭

ロハス・メディカル編集発行人

「高額医療費時代に産学連携は必要か」

森 和彦

厚生労働省大臣官房審議官(医薬担当)

「日本における新規抗がん剤開発に期待するもの」

古矢修一

岡山大学副理事(研究担当)

「日本の抗がん剤開発における
産学協同の有るべき姿について」

中村祐輔

シカゴ大学医学部教授

「高額がん治療薬;背景・課題と克服に向けた方策」

天野慎介

(一社)グループ・ネクサス・ジャパン理事長
(一社)全国がん患者団体連合会理事長

「がん患者から見た高額医療費時代の研究開発」

第75回日本癌学会学術総会パネルディスカッション

日時 2016年10月7日(金) 15:30-18:00

会場 第1会場 (パシフィコ横浜1階メインホール)



高額医療費時代の次世代がん医療開発

分子標的薬の誕生は、がん医療に変革をもたらしました。この分子標的薬による恩恵を、より多くのがん患者さんに届けるため、近年、がん研究においても、橋渡し研究や臨床研究のみならず、基礎研究領域においても、「出口」を意識した研究を推進することが強く求められる時代となりました。新薬開発で世界をリードする米国では、新規に開発されるがん治療薬において、すでにその半数以上のシーズがアカデミアやベンチャーに由来する状況となっており、日本においても、ベンチャー育成の強化と併せて、アカデミアにおける創薬研究の充実が叫ばれており、そのための戦略として、あらゆる研究フェーズでの産学連携の強化と推進が必要とされています。

一方、近年、次々と開発されるがんの分子標的薬は、その薬価が高額であるが故に、日本の国民皆保険制度の破綻に繋がると憂慮する声が強くなっています。患者さんの中にも、いま、われわれがん研究者が開発を目指している抗がん薬が、患者さんの手に届くことは、さらなる日本のがん医療費高騰につながり、逆にがん医療の充実を妨げるのではないかという懸念をもたれる方もいます。

本シンポジウムでは、こうした状況下で、日本のアカデミアにおけるがん研究の、がん医療開発における責務を、いま一度見直すとともに、日本のアカデミアに求められる産学連携のあり方は、いかなる形であるのかを考えたいと思います。

